プラーハの印象

松葉　良

昨年の夏、ブダペストよりチェコの首都プラーハを訪れた。無数の塔がそびえ、古びたオレンジ色の屋根瓦の連続の町であった。

ビザンチン、ルネッサンス、バロックが入りまざった不思議な情景は、遠い中世を感じさせ、時間が憂愁の中にとどまってしまっているように思えた。

丘の上にある古城から眺めるプラーハの町は極めて美しかった。確にヨーロッパの真の歴史が原型のまゝで生きていることを強烈に感じたのである。そしてまたこの国の偉大な不条理の作家フランツ・カフカのことに思いをはせた。

この文章を書き始めた時、現代演劇の最大の劇作家サムエル・ベケットが亡くなったことを新聞で知った。

「ゴドーを待ちながら」で有名なベケットの演劇は、確に永遠に超越的なものを求め、人間不在の不安定性と不条理をえぐりださずにはいられなかったカフカの文学の世界に通じるものであると言えよう。

そしてまた対独レジスタンスとして活動したベケットはチェコの劇作家バーツラフ・ハベルを援助していることも現代に於いて、極めて重要な意義を持っているのではないだろうか。

旧市内にある十四世紀に建てられた古めかしい市役所の時計塔を眺めた時、その装飾に極めて不思議な世界を感じたのである。

時を告げる時、塔の上の骸骨の像が小さな鐘を鳴らし始める。その時小窓が開いて中から十二使徒の人形が、あたかも日本のからくりのように一つづつ姿を現わすのであるが、その表情はいかめしいというか極めて厳しかった。その時計も二重に重なったような形で普通の時計からは余りにもかけ離れた異形のものであった。そして二つの時計が五百年を経ていることを知った時、通り過ぎていった歴史の長さがその不思議な音の中にこめられているように感じられた。

第二次世界大戦の時、ゲットーで無残にも殺された子供達の絵と詩が数多く残されている小さな美術館を訪れた。

明日への希望のないところで描いた絵、しかしそれは短かい生命の明日に向っての燃焼であったかも知れない。

そのブルーもスカーレットの色彩も、不思議な光芒に輝き、忘れることの出来ない印象を残してくれたのである。

受付にいた老婦人の人間の心を射るような鋭い目つき、その眼の光の中に、長い時間を過しても、決して忘れることの出来ない第二次世界大戦の人間の悲劇がまざまざと宿っていた。

そしてそこで見出だしたプラーハの陰影ともいえる暗い凝結された世界は何であったのだろうか。

歴史は余りにも早く過ぎ去ってしまうのだが、プラーハの町がそこに在るということから、中世という幻影のようなものが無限に拡大してゆくのである。

翌日チェコの偉大な作曲家の一人スメタナの記念館を訪れた。その建物はカレル橋に接して建てられていた。このカレル橋は石造りの橋としてはヨーロッパで最も古いものであると伝えられている。橋げたにはカレル四世を始め三十余人の聖人達の像がたっているが、それは極めて不気味な感じがした。

記念館の古ぼけた無人の広い部屋の中央には、スメタナの遺品であるグランド・ピアノがおかれ、壁には数多くの楽譜や写真等が、無造作にかけられていた。

急にどこからともなく、彼の代表作品である「我が祖国」の中のモルドウ川の旋律が聞えてきた。遠く過ぎ去った時の流れの中で、このピアノでスメタナがモルドウを作曲したであろうことを考えた時、感無量であった。

静かに戸外に出た時、眼の前のモルドウ川に音もなく数羽の白鳥が浮んでいるのを見た。

最後に一九四四年、アウシュヴィッツで死亡したパヴェル・フリードマンという十二歳の少年の書き残した詩によってこの稿を結びたい。

蝶

チェッコ語訳詩　栗栖　継

あの最後の、ほんとうに最後の……
太陽の涙が白い石の上に落ちて
鐘の音のように鳴ったら
こんな色になるだろう。
――濃くて苦いほどまっ黄色の蝶々は
ひらひらと高い空に舞い上って行った
きっと自分の世界に最後のキスをしに
行ったのだろう。
ぼくはここに七週間暮らしている。
タンポポと中庭の栗の木の白い枝が
ここではぼくに向って呼びかけている。
けれど蝶々をここでは見かけない
あの時のあの蝶々が最後だったのだ
ここゲットーには蝶々は住んでいない。